慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾初代社会学教授 田中一貞
Sub Title	
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1990
Jtitle	近代日本研究 Vol.7, (1990.) ,p.1- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾における知的伝統
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19900000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾初代社会学教授　田中一貞

川合隆男

㈠ はじめに
㈡ 明治期社会学界と慶應義塾
㈢ 田中一貞の生涯
㈣ 田中一貞の「ハートの教育」と社会学
㈤ むすび

㈠ はじめに

四季の折々に草花や樹木は息吹き、花咲き、緑陰となって、われわれに自然と共に生きる喜びと限りない恩恵とを与え続けている。そして、数限りない草花や樹木は大地に根づき、それぞれの風土のもとで幾星霜の風雪を耐えて生き続けようとする。

学問活動も、野に咲くタンポポの如く、一粒の樹種の如く、条件さえ適すれば、どこにでも生きづき根づくことも可能であろう。しかし、それを人間の営みとして根づかせて長い風雪のもとでそれぞれの年輪を刻み続け、

季に適して花咲かせ、人々の憩う大きな緑陰であり新たな旅立ちへの道標であり続けることは容易ではない。また、人々の間で草花や樹木についての趣向が異なるように、「知的伝統」の検証もそれを試みる人間の視点によっても異ならざるを得ないだろう。ここでは、わたしはひとりの社会学徒として、近代日本社会学の全体の展開をひとつのある樹林に例えて、そのなかでの一本の樹木としての「慶應義塾における知的伝統」を社会学の動きに焦点をあてて考察してみたい。

「慶應義塾における知的伝統」のひとつとして社会学の場合を考察するにあたって、次のような基本的な三つの視点を重視して「慶應義塾初代社会学教授　田中一貞」をとりあげていきたい。(i)近代日本に新しい学問としての社会学を根づかせ育て上げていくという作業も、一本の樹木が風雪に耐えて根づき年輪を刻み続けると同様に、試練の連続であり苦闘の歴史であったといわなければならない。教育・研究機関としての大学等もひとしく近代日本の学問活動をになう機関として出発したとしても、それぞれが固有の建学の背景と歴史を担って創立されて新たな学問・教育・研究活動を展開してきたのである。土壌もそれぞれ異なるし、それを育てかかわる人々も異なってきたのである。従って、近代日本社会学史研究において、これまでは近代日本全体としての社会学史研究に明らかに重点がおかれて個々の大学や教育・研究機関等における社会学史、社会学の歩みを克明にし、検証するという作業が軽視されてきたといえる。各大学等の「学校史」、「地域史」の研究も盛んであり蓄積も多くなってきており、それだけにそれぞれの機関・集団における社会学の学問活動の個々の小さな組織化や制度化の試み・動きにも眼を向けて、全体としての近代日本社会学史研究を深め拡充していく必要がある。[1]「森」と「木」の相互の関連がここでも問われなければならない。

(ii)近代日本社会学史研究にあたっては、いくつもの観点からそれを進めることが可能である。(一)哲学思想・社

会思想・社会学思想、社会学理論、㈡社会問題と社会観察（社会調査）、㈢学問活動の制度化、㈣社会学の専門分化過程などに焦点をあてて研究を進めることである。それらを相互に関連づけながら行なうこともできる。従来の近代日本社会学史研究においては特に㈠哲学思想・社会思想・社会学思想、社会学理論を中心にして試みられてきたといえる。㈡～㈣については一部を除けば、まだ部分的で断片的な段階にあるといわなければならないだろう。更に、今後もっと積極的に試みられていくべき観点は、個々のひとりひとりの人間、社会学者の生涯にそくして彼の、彼女の社会学の営みを跡づける作業である。公刊された「社会学書」「社会学論文」等だけでなく、そのひとりの、仲間の、人間の「社会学的生涯」を考察する作業である。いくつもの制約があって極めて難しい作業であるが、ひとつの時代に生き学問活動にかかわった人間が存在しいつでも語り合え、そして新たな出会いとなるような社会学史研究にしていく必要がある。社会学史研究における「生活史」「パーソナル・ヒストリー」「ミクロ・ヒストリー」と「マクロ・ヒストリー」とを相互にどのように関連づけていくのかという作業である。

そして、㈢慶應義塾に学び多少とも慶應義塾にかかわってきた者にとって、いささか捉えにくく厄介な視点、課題は、「慶應義塾における知的伝統」をどのように対象化し・理解し、更に如何に継受し・批判し・発展させていくのか、という視点であり課題である。これまでわたし自身にこうした問題への関心自体が極めて乏しかったといわなければならない。果たして福澤諭吉の知的伝統と「慶應義塾における知的伝統」とは同じものとして捉えられるのか、どうか。両者は確かに重なり合う部分が多いとしても、「窮理」、実証と活きた学問としての実践に支えられた「実学」、活達で自由な「私立」の立場、個人主義、在野精神、批判精神、「我以作古」の進取の気質、学問をすら人間交際のための術とする知的な戯れ精神などにみる福澤の知的伝統の特徴と「慶應義塾におけ

る知的伝統」の形成とは、一応概念上、またそれらを検討する方法論の上でも区別して考えてみる必要がある。福澤にみる知的伝統の特徴が、その後の慶應義塾においてどのように継受され発展されてきたのか、あるいはそのような特徴から乖離しその方向性を見失ってきたのか、という視点である。

ここでは、このような基本的な視点に立って慶應義塾初代社会学教授　田中一貞（一八七二－一九二一、明治五－大正十年）をとり上げて検討したい。慶應義塾にかかわった社会学者の足跡や業績に関する研究もまだ不充分なままなのでこれらの研究も今後の課題であるが、田中一貞に関しては佐原六郎先生の残された小文もあり、(2)これらをひとつの手懸りとして、以下㈠明治期社会学界と慶應義塾、㈡田中一貞の生涯、㈢田中一貞の「ハートの教育」と社会学、の順で言及していくことにする。

(1) こうした試みの例として、『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』一九五四年、『早稲田百年と社会学』早稲田大学社会学研究室、一九八三年などを挙げることができる。

(2) 佐原六郎「慶大の初代社会学教授（田中一貞）」『三田社会学会誌』四号、一九五七年、一－三ページ。丸山信編著『福澤諭吉とその門下書誌』（慶應通信、一九七〇年）のなかの「田中一貞」（一九三－四ページ）、『新編庄内人名辞典』庄内人名辞典刊行会、一九八六年などを参照のこと。

㈠　明治期社会学界と慶應義塾

明治期の社会学の特徴は大きく社会進化論、社会有機体論を軸とする総合社会学として特徴づけられ、そして心理学社会学を胚胎する動きとして理解されるが、実際にはいくつもの可能性を内包しつつ展開されたのである。哲学思想、社会思想等を基礎としつつも、哲学、心理学、文学、人類学、政治学、法学、経済学などの他の学問

運動とも重複しつつ半ば未分化のまま複合的に展開されたのであった。

明治期の社会学界を考察していくうえで、時期的には一八五〇・六〇年代から一九〇〇年代初年代（明治三〇年代前半）頃までの時期とそれ以降の時期とに一応大きく二分して検討してみることも必要な作業といえる。前者は近代日本において社会学が学問的にも体系化されたり制度化される以前の、社会学の学問としての息吹きの時であり「草創」の時期である。後者は東京帝国大学の建部遯吾によって、その東京帝大に一九〇三（明治三六）年に社会学研究室が創設され、やがて建部と京都帝大の米田庄太郎らが中心になって一九一三（大正二）年に日本社会学院が設立され学問運動としての社会学が本格的に組織化され制度化されていくまでの時期をさしている。これらのうち、後者の時期における社会学の動きに焦点をあてすぎると、前者の時期における学問運動としての社会学の動きにみる多様な系譜や曲折が見えにくくなり易い。ここでは学問活動における多様な系譜と小さな組織化や制度化の動きに基本的な視点を捉えて考察していきたい。

特に幕末ないし明治初年から明治三〇年代前半期までの社会学の動きの多様な系譜として次のような動きが注目される。(i)福澤諭吉、H・スペンサーなどの哲学思想・社会思想・社会学思想にみる近代自然法思想、自由主義、社会進化論の系譜、(ii)西周、フェノロサ、外山正一、有賀長雄、加藤弘之などにみる社会進化論、社会（国家）有機体論の系譜、(iii)片山潜、安部磯雄、浮田和民、岸本能武太などキリスト教関係者などによる社会運動、社会改良・社会事業との関連にみる系譜、(iv)松原岩五郎、横山源之助、杉享二、呉文聡など民間のジャーナリスト、一部行政官僚による社会観察、社会統計事業などにみる経験的社会論、経験的社会学の系譜などである。明治期社会学界と慶應義塾という観点からすれば、ここでは(i)と(iv)の動きが注目される。

(1)明治期社会学界における福澤門下および慶應義塾関係者の活躍

福澤諭吉の「一身独立して一国独立す」という、その「一身独立」の「独立自尊」から広く「人間交際」を求めんとする思想と社会学的考察、実証精神、批判的精神と批判的分析は今もなお新鮮である。近代日本社会学の草創期以後の「国家有機体説」に傾斜する主流社会学の潮流とは異なる視座が育まれようとしていたのである。『学問のすゝめ』はもちろんのこと、『文明論之概略』『民情一新』『旧藩情』『男女交際論』などいずれもすぐれた古典であり方法論をあわせもつ社会学的考察の書である。福澤蔵書のうちの一部である H. Spencer, First Principles (3rd ed., 1875), H. Spencer, The Study of Sociology (1874) は、福澤の手沢本で随所に余白に書き入れもあり、彼の幅広い勉学と思索の跡を読みとることができる。近代日本社会学史研究において福澤諭吉の社会思想・社会学思想・考察を社会学的な源流、社会学史のひとつの重要な系譜として再検討していく課題が依然残されている。

サン－シモン (Saint-Simon, 1760-1825)、A・コント (A. Comte, 1798-1857)、H・スペンサー (H. Spencer, 1820-1903) は社会学の創始者、祖のひとりとされ、一九世紀の思想界に大きな足跡をのこした人物であったが、彼らは大学の教授職や官職の地位にあったのではなく、在野・民間の思想家であり著作家であり実践家であった。コントの『実証哲学講義』(全六巻) (Course de philosophie positive, 1830-42) も、スペンサーの『社会静学』(Social Statics, 1850)、『社会学原理』(全三巻) (The Principles of Sociology) も彼らの思想に理解を示す数少ない有志や篤志の人々に支えられて細々と、しかし鋭意に継続された著作活動の所産であった。彼らの思想の影響力は、当時の他の人々の社会思想と共に、ヨーロッパを越えてアメリカや日本、その他の国々などにも広範に及んだのである。

特に我が国ではH・スペンサーの著作は明治前半期において、J・S・ミル等の書物と同様に熱烈に読まれた。この変転と開化の時期にスペンサーの民権に基礎をおく自由主義、個人主義、社会進化の思想は魅力的であった。

慶應義塾は「実学」としての科学、人文科学、社会科学、近代科学を通じて人々の一身の独立、私立をめざして教育・学問に情熱を傾けてきたといえる。近代日本の歩みに照らして、特に明治前半期には西洋各国の科学、政治風俗、経済、法制、歴史、哲学思想、政治思想、社会思想などに関して旺盛な知識の吸収が試みられた。慶應義塾においては、直接に洋学を学ぶ主旨から早くよりウェーランド、ギゾー、バックル、トクヴィル、ミル、スペンサーなどの洋書・英書が「会読」や「翻訳」の授業を通じて熱心に学ばれていたのである。こうして培われた素地によって塾員による数多くの翻訳書が生み出され、自由民権運動期には特にH・スペンサーの書物などが福澤門下の塾員達によって訳出されていったことは注目される。

尾崎行雄（一八五八－一九五四）の訳（H・スペンサーの原著、Social Statics, 1850, の抄訳）『権利提綱』（明治十、十一年）、松島剛（一八五四－一九四〇）の訳（H・スペンサーの原著、Social Statics, 1864, の全訳）『社会平権論』（明治十四年、巻一－明治十七年、巻六、合本）、渡辺治（一八六四－一八九三）・浜野定四郎（一八四五－一九〇九）の共訳（H・スペンサーの原著、The Principles of Sociology, 3 vols, 1876-1896, のうちの第二巻第五部、Political Institutions の部だけを訳出した）共訳『政法哲学』（明治十七－十八年）などは塾員のそうした試みの例である。馬場辰猪（一八五〇－一八八八）の論説「本論」（明治十五年）、同じく彼の講義「スペンセル氏原著、哲学原論」（明治十七年）、「『スペンサー氏原著、万物進化要論』序」（明治十七年）も、H・スペンサーとの関連で注目される。[1] 山口松五郎（一八五三－一九〇七(?)）訳の『哲学原理』（上巻）（明治十八年）は、H・スペンサーの First Principles, 1860, の第一部「不可知界」（The Unkowable）を訳したものであり、同じ山口訳『社会組織論』（明治十五年）もスペンサーの "The Social Organism" (in The Westminster Review, Jan., 1860) を訳出したもので、主に社会と個々の有機体との間の類似と差異を論じたものであった。

当時の重要な政治的関心・論点にも触発されつつ、広く社会と人間の関係、人間交際を研究する学問分野が意図され、sociology, sociologie の訳語をめぐってそれまで使用されてきた人間学・交際学・世態学・社会学の名称が明治十年代より次第に「社会学」という名称に定着し、個別の学問分野としての社会学の自立化の歩みが開始されていった。塾員・乗竹孝太郎（肅堂）（一八六〇－一九〇九）の訳本（H・スペンサーの大著、The Principles of Sociology, 3 vols のうち第一巻のみ訳出）『社会学之原理』（全三冊）（明治十七－十八年）、東京大学教授・有賀長雄著『社会学』（全三巻）（巻一―社会進化論、巻二―宗教進化論、巻三―族制進化論）などがある。しかし、哲学体系、哲学思想、政治思想、社会思想のなかから個別の学問としての社会学の自立化の歩みは、複合的であり、さまざまの動きと結びつき触発され、徐々に試みられていった。

近代日本における学問運動としての社会学の草創は、特に明治前半期における哲学思想や社会学思想の紹介導入による啓蒙、社会学的考察・洞察、自由民権運動等の動きに加えて、明治中期・後半期において現実に顕在化してきた都市貧民窟の存在、貧困問題、新平民の社会的地位、労働者の地位、労働条件、衛生・鉱毒問題、生活問題、階級問題などの産業・労働問題などが新たな社会問題との対応のもとで展開されていった。外国の書物の翻訳等に依拠するだけでなく、近代日本の現実の動きを自らの手足と耳目で観察し、経験的、実証的に科学化する試みも開始されていった。数多くの探訪・観察・ルポルタージュ・告発・調査・記録文学等が新聞、雑誌、出版刊行を通じて繰り広げられていった。松原岩五郎（乾坤一布衣）『最暗黒之東京』（明治二六年）、『社会百方面』（明治三〇年）、横山源之助（天涯茫々生）の『日本之下層社会』（明治三二年）、『内地雑居後之日本』（明治三二年）などとともに、こうした動きにおいても、慶應義塾と『郵便報知新聞』、『時事新報』との関わりで矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄、鈴木梅四郎、加藤政之助など慶應義塾関係者の活動には特筆すべきものがあった。また、わが国の実

情を現実に即して経験的に把握しようとした試みは、人口・産業・民勢・国勢の調査などにもみられるように統計事業、統計学の分野においても展開された。杉享二、高野岩三郎らと共にわが国の統計事業・統計学の近代化に貢献したのが呉文聡（一八五一－一九一八）であった。

このような動きに加えて、幅広い問題関心、思想傾向や系譜をもちつつ、他方では学問活動の組織化と自立化も積極的に試みられていった。草創期だけにその組織的基盤は弱かったが、さまざまな多様な学問傾向や思想傾向を共有する可能性や活力を内包していたといえる。

自然科学系の諸学会の創立に比して、文科系の諸学会の組織化は時期的にはやや遅れて出発している。統計協会（明治十三年）、哲学会（明治十七年）、国家学会（明治二〇年）、史学会（明治二二年）、社会政策学会（明治二九年）などが創立されたが、社会学界においてもその学問活動の組織化が布川孫一（孫市）、高木正義、加藤弘之らを中心に初めて試みられたのは、一九〇〇年前後であった。具体的には「社会学会」（一八九六－一八九八年）（明治二九－三一年）が設立され、この学会が解消、再編されて「社会学研究会」（一八九八－一九〇三年）（明治三一－三六年）が引きついで組織されたのであった。

「社会学会」「社会学研究会」は確かにいずれも短命であったとしても、多くはお雇い外国人の教授や講師に依存しつつ個々人や個別の学校や大学、分野等での学問教育活動・運動が漸くそれらの依存や枠を超えて広がる活動組織を創出した意義は大きい。新しい学問運動が土着化し継続化され、わが国の社会学を自立化に向かわせる契機をもたらしたともいえる。米国をも含めて諸外国の社会学の新しい動向が広く紹介される動きとも連らなっていった。

「社会学会」は『社会雑誌』、「社会学研究会」は『社会』『社会学雑誌』を学会誌として刊行したが[2]、当時の社

会事業、社会改良運動、社会問題研究、社会学、労働運動、社会主義運動等に関係した人々がこれらの学会や雑誌にかかわっていた。これらの学会の中心のひとりであった布川孫市は慶應義塾に一時入社在学しており（明治十八年九月入社）、この学会活動当時は明治女学校で社会学を講じていた。高木正義（高木三郎の婿養子）は当時建部遯吾とともに東京帝大の社会学講師であったが慶應でも「社会学」、更に理財科では「貨幣論」「銀行論」などの講義をも外来講師として担当していた。この当時の社会学の学問活動においては慶應義塾関係者、東京帝大関係者、早稲田関係者、更に在野の運動家等が中心的に参画していた。

(2)諸学校における社会学講義と慶應義塾における社会学講義

近代国家体制化と文明開化を急ぐ当時にあっては、西洋の文物・制度等の導入も日本人の視察、留学、お雇い外国人等を通じて積極的に進められた。東京大学では明治十一年に米国のフェノロサ（E. F. Fenollosa, 1853-1908）が哲学・政治学・理財学教授として来日し政治学の前提として社会学の講義を始めている。フェノロサは東大に明治十九年まで在職し社会学を講義したが、この当時は Sociology は「社会学」と訳されることは少なく講義名としては「世態学」という名称であり、スペンサーの社会進化論を基礎にした講義であった。[3] 東大ではフェノロサのあとは、社会学は外山正一（明治三〇年十月東京帝国大学総長となる）—高木正義（社会学講師、明治三〇-三四年七月）・建部遯吾（明治三一年八月海外留学-三四年十月帰朝）—戸田貞三などに引き継がれていった。

明治十五年に創立された東京専門学校（明治三五年九月に早稲田大学と改称）では、東京大学で有賀長雄らと同級であった高田早苗がまず明治十五年に専ら「スペンサー氏著社会学」を講義し、明治十七年度は坪内雄蔵（逍遥）が「社会学」を担当し、以後、明治三二年まで三宅雄二郎（雪嶺）、立花銑三郎、岸本能武太（同志社出身）、大石熊吉郎、建部遯吾、高木正義らが短期間で交替した。次いで明治三三年には同志社より招かれた浮田和民が社会

学を歴史学、政治学などとともに担当していた。また、この当時やはり同志社出身の安部磯雄は「社会政策」や「都市問題」を担当していたのである。明治四二年には遠藤隆吉も招かれて社会学を担当していた。[4]

「明治三十年前後の社会学界、社会運動」に関して後に追談をしている布川静淵（孫市）は、その当時の諸学校における社会学担当について次のような記述を残している。

当時学校に於ける社会学は如何なりしかと云うに、三十三年頃は東大に高木氏、早稲田に浮田和民氏、高等師範に遠藤隆吉氏、本願寺大学に岡百世氏、明治女学校高等科に私が講義しました。三十五年頃は右の外、建部博士は東大に、巣鴨大谷派大学に樋口秀雄氏、京都同志社にロンバート氏の講義担任があった。明治三十年直後は其以前のスペンサー一天張よりは相当に変った趣きがあることを推察されましょう。[5]

慶應義塾においては、明治十年に東京開成学校と東京医学校とが合併改称して「東京大学」（明治十九年に東京大学は帝国大学令によって東京帝国大学となる）としてすでにスタートしていた東京大学等と較べると、当時は講義課程はまだ未分化で、「社会学」（世態学）がひとつの独立した教科目としては設置されていなかった。専らウェーランド、ギゾー、バックス、トクヴィル、ミル、スペンサーなどの洋書・英書を原典で、「スペンサー氏社会学講義」や「ミル氏代議政体論輪読」のような形で「英書訳読」や「翻訳」の科目として貪るように学び取っていた。そのことが福澤のもつ思想に強く影響されつつ西洋の自由主義的な社会思想や新しい学問動向をいち早く摂取し文明を開き普及させていく大きな力となった。[6]

「社会学」が課程のなかで教科として設置されたのは、明治二三年一月の大学部開設以降のことと思われる。『創立百二十五年、慶應義塾年表』によると、明治二三年一月二七日に「大学部第一回始業式挙行。入学者五十九名（文学科二十名、理財科三十名、法律科九名）」と記されている。[7] 大学部開設は、私学界未曾有の事として一般に

は非常に注目され、「……次で来るべき我国私立大学の勃興に対する大刺戟となり、実に日本文化史上大に誇るべきものであったこと勿論であるけれども、然し始めの頃塾内に教授の用意があった訳でなく、殆んど全部他よりの助力を借らざるを得なかった。主任教授が各科共外国人であったばかりでなく、其他殆んど皆他校出身者であった」[8]。

当時の義塾大学部におけるこのような外国人教師や他校出身の講師等による講義の事情は、社会学についても全く同様であった。米国ハーバード大学より招聘した文学科のW・S・リスカム、理財科のG・ドロッパース、法律科のJ・H・ウィグモアがそれぞれの学科主任であり、学科の主要科目を担当したことはよく知られている。「社会学」は、大学部開設以降に主として文学科を中心に設置され、L・ライド（明治二五年一月-三〇年一月）、ウード（明治三〇年-三一年一月）、G・ドロッパース（明治三一年一月-同年末。ドロッパースは明治二二年十月に二九才で来日して、明治三一年まで在籍し「近世経済史」「財政論」「経済学諸派概論」「貿易論」などの科目を担当していたが、この期には一時的に急遽「社会学」をも合わせて担当したものと思われる）らの外国人教師、そして東京帝大出身で、当時社会学講座を建部遯吾講師と分担していた高木正義（文学科、明治二八年-三四年中途。政治科、明治三二年四月-三四年中途）が慶應義塾にも出校して講義を続けていたのである。林毅陸と川合貞一は、開設当時の学生として当時の講義の様子を次のように所懐している。

教室に於ての当時の勉強は、外人教師が主なる科目を担当しているのであるから、第一に英語の講義の筆記がなかなかの苦労であった。社会学も私はライドという英国人の講義を聴いた。それで始めの一学期位いは殆んど夢中で過ごし、ノートの整理に忙殺されたのであるが、それでも自然に耳も慣れ手も慣れて、どうやら済まして行った。一組の学生数が概して五六名又は十数名というのであるから、好都合であった訳である。[9]

心理学や倫理学は米国の宣教師ノックス（明治学院の教師を兼ねていた）が受持っていたが、ラッドやマルチノーの学説を一部分取って来て述べたゞけで、講義の筆記はしたものの何の印象も残っていない。社会学も英国の宣教師ライトというのが講義したが、スペンサーの社会学の梗概を述べたものに過ぎなかった。然しノックスに較べると人物に剽軽なところがあり身振りおかしく講義したから、その身振りだけが今なお眼に残っている。(10)

慶應義塾において専任の社会学初代教授とされるのは、田中一貞（一八七二－一九二一年、明治五－大正十年）であった。田中は明治二六年に大学部文学科に入学、明治二九年十二月に卒業、明治三二年四月に第二回義塾派遣留学生として海外留学し同三七年三月に帰国、同年四月に大学部教授に就任する。文学科、理財科、政治科などで「仏語」と「社会学」を専ら担当した。

(1) いずれも『馬場辰猪全集』（第二巻）、岩波書店、一九八八年、に所収。

(2) 『社会雑誌』は一八九六（明治二九）年十一月に発足した「社会学会」の機関誌で、一八九七（明治三〇）年四月－一八九八（明治三一）年八月、第一巻第一号―第十五号と十五号まで継続した。『社会』は一八九八（明治三一）年十一月に「社会学会」のあとを受けて発会した「社会学研究会」の機関誌である。一八九九（明治三二）年一月－一九〇一（明治三四）年十二月、第一巻第一号―第三巻第十二号まで継続されたが、一九〇二（明治三五）年二月より雑誌名を改題し追号して第四巻第一号から第五巻第三号と一九〇三（明治三六）年四月まで継続刊行されたものである。『社会雑誌』の主たる執筆者は、布川静淵（孫市）、加藤弘之、片山潜、高野房太郎、松村介石、井上哲次郎、田島錦治、島田三郎、生江孝之、佐久間貞一、小河滋次郎、高木正義、呉文聡、横山雅男などであった。

また、『社会』および『社会学雑誌』の主な執筆者は、布川孫市、高木正義の他、加藤弘之、小河滋次郎、原胤昭、留岡幸助、片山潜、窪田静太郎、有賀長雄、浮田和民、岡百世、樋口秀雄、十時彌、元良勇次郎、呉文聡、井上哲次郎、坪井正五郎、石川千代松、豊原文男、前田貞次郎、穂積陳重、河上肇などであった。なお、『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』の「雑誌記事目録」については、川合隆男編『近代日本社会調査史（I）』（慶應通信、一九八九年）所収の末尾「付録」を参照のこと。

(3) A・F・フェノロサ講述・金井延筆記（秋山ひさ編）『フェノロサの社会学講義』（Fenollosa's lectures on sociology）、神戸女学院大学研究所、一九八二年。

(4) 『早稲田百年と社会学』前出。

(5) 布川静淵「明治三十年前後の社会学界、社会運動に関する追懐談」(日本社会学会編輯)『社会学雑誌』第五三号、昭和三年九月、九九ページ。
(6) 当時の社中の卒業後における英書等の文献を通じての自学自習の様子を鎌田栄吉は追憶して文章に残している。「自伝を語る」のうち、「慶應義塾へ入学」「慶應義塾卒業以後」『鎌田栄吉全集』第一巻、一四四－一七九ページ、『慶應義塾百年史(別巻・大学編』一九六二年、一四－一七ページ。
(7) 慶應義塾福澤研究センター編『創立百二十五年、慶應義塾年表』昭和六〇年、一六ページ。
(8) 林毅陸「私の思出—大学部開設五十年—」『三田評論』第五一四号、昭和十五年六月、八ページ。
(9) 林毅陸、同書、七－八ページ。
(10) 川合貞一「大学部創立五十年を迎えて」『三田評論』第五一四号、昭和十五年六月、四ページ。

(三) 田中一貞の生涯(一八七二－一九二一)

田中一貞(いってい)(一貞)は、明治五年七月十二日に田中一俊の三男として庄内・鶴岡(この時は酒田県その後、鶴岡県と改められ、明治八年に山形県に併合)に生まれた。明治十三年四月に山形県西田川郡鶴岡蔵修学校(平田学校が明治十一年に蔵修学校と改称)入学、同二〇年四月、同県鶴岡朝暘高等小学校を卒業。明治二〇年から二一年にかけては、鶴岡の私塾英学舎[1]で主に英語を勉学の後に、明治二二年十七才で上京し東京英語学校及び東京物理学校に入学している。雑誌『現代之実業』(特集・三田人物論)によると、この当時の田中の勉学について「十七才で出京、爾来困苦して勉学[2]」と短く記されている。

慶應義塾に明治二三年十月に入社し、林毅陸などと共に二六年一月大学部文学科に入学、二九年十二月に卒業している。田中一貞が入学当時の大学部の様子を調べてみると、明治二六年度の大学部各在学生数は、文学科

（一年一五名、二年十二名、三年六名、小計三三名）、理財科（一年十九名、二年二〇名、三年十八名、小計五七名）、法律科（一年六名、二年二名、三年五名、小計十三名）で大学部全部で百名余の人数規模であった。[3] また、田中が入学した二六年においても継続されていた「明治二十三年一月、慶應義塾大学部文学科として発足した当初の課程」は次のとおりであったが、東京帝国大学文科大学の哲学科・国文学科・漢文学科・国史学科・史学科・英文学科・独逸文学科・仏蘭西大学科の八学科に比すと、単一未分科の課程として設置されていた。

第一学年　修辞学講義、修辞演習、英米文学史、歴史、和文学、漢文学、論理学、羅甸語、和漢作文

第二学年　修辞学、論文演習、英米文学史、心理学（第一及第二期）、倫理学（第三期）、歴史、教育学、和文学、漢文学、仏語（随意）、独逸語（随意）、和漢作文

第三学年　修辞学、英米文学史及哲学史、社会学、和文学、漢文学、審美学、仏語（随意）、独逸語（随意）、和漢作文

田中の学生生活のことについては詳しくは知り得ないが、先に引用した林毅陸「私の思出―大学部開設五十年―」のなかに、「ロイド先生は以前より塾の教師であったのが、新に文学専任となったのである。三田の構内の、後にヴィッカース・ホールとして塾生間に知らるゝに至ったその建物に住み後に高輪に移られたが、私は三田時代より邸内に寄宿を許され、高輪に移ってからは、附属の日本家屋内に二三の他の学生と共に寄宿していた。その時田中一貞君も同室の仲間であった。ロイド先生からは教室の内外に於て種々の指導を受け、極めて有益に学生時代を送り得たことを深く感謝している」[5] と記しているように、少人数なこともあって各学科を問わず教師と塾生、塾生間の交流も密接なものがあったと思われる。

福澤諭吉と塾生との交流も極めて密であったことも伺わしめる。福澤の「諸文集」として整理されているもの

のうちの覚書「明治二十七、八年頃塾生求職者の覚」に、明治二七年十二月一日「同日、震災の話に来　鶴岡、田中一貞[6]」と田中の名前が記されている。これは日清戦争のさなか、明治二七年十月二二日に旧庄内領の飽海・東田川・西田川の三郡に起きた「庄内地震」を指している。庄内三郡に於ける被害の大要は、全潰家屋二六七七戸、全焼家屋一四八九戸、死亡人員七二三人、負傷者一〇六一人の惨状に及んだ大きな地震であった[7]。更に福澤の「書翰集」に収められてある「田中一貞宛」の書翰は福澤の塾生田中一貞に対する情愛が如何に細やかであったかを識ることができる。

田中一貞宛[8]　明治二十八年十二月二十四日

本月廿一日の華翰致拝見候。其後御様子も不承候処、一時は随分御難渋のよし、何卒速に御全快を祈るのみ。其要は唯精神を安んずるより外に法は有之間敷、医者も薬も殆んど無益と存候。但し人間は全く無為にして居るも却て苦しきものなり。若しも少々御快方とあらば読書抔は固より厳禁なれども、或は鶏を飼ふとか牛馬を養ふとか、又山林の事業等、責任の極めて軽きものを択てぼつ〳〵御運動は可然やう被存候。老生も先づ無事にて不相変身体を養ひ毎日歩行、又は居合、米つき等、怠りなく致し居候。

腰間秋水一揮揚　自是先生養老方
二豎多年侵不得　知他宝剣吐龍光

右は居合の詩なり。御一笑可被下候。頓首。

二十八年十二月廿四夜　　諭吉

田中一貞様

尚以老妻始家内子供よりも呉々御伝声申上候やう申聞候。以上。

〔註　封筒表「山形県西田川郡鶴岡中道　田中一貞様　平安」同裏「封　東京芝区三田　福澤諭吉」スタンプ「武蔵東京三田・廿八年十二月二十五日・ニ便」「羽前鶴岡・廿八年十二月二十八日・イ便」。田中は山形県鶴岡の人、明治二十三年十月入門。卒業後

日向延岡の亮天社教頭を経て、後に慶應義塾大学教授となり図書館長を勤めた。〕

この福澤の田中宛の手紙は、同月二一日付の田中の郷里鶴岡より寄せた手紙に対する返信であったが、長年来の苦学の故に「衰弱せる精神と身体」を養生すべく勉学を中断し郷里に帰省し、卒業を延期せざるを得なかった田中への暖かい励ましの手紙であった。二〇余年をも経た後年になって、田中は「福澤先生の情的方面」という文章のなかで、「福澤先生は事実非常に卓見な人聡明な人であった。知識が豊富にして、物事の理解に鋭敏であったことは真に敬服の外ない。先生は決してそれのみの人ではなかった。」「……先生にはこれ以外に尚ほ非常に大なる徳があった。それは、一口に言うと人を動かす力であった。」[9]として、その一例としてこの田中宛の手紙に触れている。「先生はまた後進子弟を導くに苟くも委曲を悉さざるなかった。私は或る時、先生の厚い恩を受けて居乍ら、中途病に冒されて故国へ帰り、久しくその眷顧（けんこ）に背かざるを得なかった。すると、或る時、先生は自ら手紙を手記されて、それに詩作まで書き添え丁寧なる慰藉状を賜わったのである。……この一文が当時病中の私を如何に慰め如何に感動さしたかは私は生涯之を忘れることは出来ぬ」[10]と結んでいる。

明治二九年十二月に田中一貞は、前年に卒業した林毅陸、占部百太郎、三輪勘重らよりも一年遅れて、奥村信太郎、川原春雄、英比豊次郎、宮島巌と共に大学部文学科を卒業（五名）した。この時の卒業写真には、以上の学生（卒業生）とともに、森鷗外、門野幾之進、小幡篤次郎、福澤諭吉、ロイド、ライド、家永豊吉、坂田丈平、向軍治の教師らが写っていた。[11]

大学部文学科を卒業した田中は、翌明治三〇年一月から同三四年二月迄の約四年間、宮崎県東臼杵郡延岡町の私塾亮天社（りょうてん）の教師として赴任している。亮天社は旧延岡藩主で慶應義塾に学んだ内藤政挙（亮天社社主）が設立した一私学であったが、延岡亮天社は、明治初年から県立延岡中学校が設立されるまでの約三〇年間（明治八－

三六年）延岡地方唯一の中学教育校として寄与、貢献し、多くの人材を輩出した全国でも稀有な権威ある私立中学校であったとされている。[12] 田中一貞が記した「亮天社及び其学風」の小論は当時の亮天社を知るうえでは貴重な資料でもある。赴任するにあたっての理由に触れて田中は「加うるに予が招かれたる亮天社は、微々たる一小学舎に過ぎずと雖も、純粋なる義侠的の一私立学校にして内外上下の拘束少く、自主自由の人物を養成するに最も適当ならんと思いたればなり、其他十年来苦学の結果として衰弱せる精神と身体とを恢復し他日事をなすの基礎を造らんと思える事も、又其原因と云わざるを得ず」[13] と記している。この亮天社と慶應義塾との関係は深く「社主内藤政挙君も塾員にして、塾員藤田一松氏は久しく此社に教鞭を執り後慶應義塾に転せり。其他曾つて同社教員たりし大島雅太郎氏、松本純次郎氏、加藤好太郎氏等皆塾員にして現に同社の教員たる佐々木良太郎氏も塾員の一人なり」[14] とあり当時社長（校長）はやはり塾員の雨山達也（明治七年正則科卒）（一八五六―一九三三）であった。『慶應義塾百年史（付録）』の「年表」には明治二八年（一八九五）十月十五日の事項に「宮崎県延岡町亮天社学校の要請により、同校と契約して、校長兼教師を義塾教員中より二年交代にて派遣することを議す（十二月二六日、雨山達也赴任）」[15] とあり、校長雨山も、そして新任教師田中一貞もこの契約にもとづいて派遣されたものと思われる。

亮天社の教科について「最も国文、唱歌の科目を置かずして、論理、経済学の初歩を置けり。大抵は原書を用い、而して本は学校より貸与す。殊に英学に重きを置き、近年語学の進歩に意を用いて大に好成績を呈せし」[16] と述べている。亮天社の学風について、「然かく自主自由の空気に富み、和気蕩々とし、南風の薫するが如き」とし、自ら教師として教師の資格を「……自ら生徒を愛せずして生徒に愛せられんことを思うなかれ、規則は力にあらざるを知れよ、涙なき教育家は教授屋なることを記せよ。社会人類の為に人物を作れ、学校装飾の為に生徒

を鋳造すること勿れ、誠心を生徒の口より吹きこめよ」と記している。人間福澤諭吉に感動し、後にみる論文「ハートの教育」に示されるように延岡の地で教育家田中一貞の中軸が形成されていったものと思われる。

明治三四年五月には、田中一貞は林毅陸とともに慶應義塾派遣（第二回）留学生のひとりとして派遣され、米国ではイェール大学大学院で「サムナー氏、ブラックマン氏等に就き社会学研究」につとめ、一九〇二（明治三五）年五月マスター・オブ・アーツの学位を得、次いでフランスに渡りコレージ・ド・フランスに於いて「主にタールド氏の社会心理に関する講義」等を聴き、更に「独逸、瑞西、英吉利等の学事及び社会事業視察」を重ねて三年近くの海外留学を経て明治三七年三月二日に帰国している。[17] そして前述のように明治三七年四月慶應義塾大学部教授に就任し文学科、理財科、政治科等で社会学と仏語を講じるに至る。ここに「慶應義塾初代社会学教授田中一貞」が誕生する。丁度田中が明治二九年十二月に慶應義塾を卒業しその後延岡亮天社で教鞭をとり、更に留学生として海外に派遣され、明治三七年三月に帰国するまでの間に、日本の社会学界では、布川孫市、高木正義、加藤弘之らによって、「社会学会」（明治二九年末－明治三一年）が創立され、また「社会学研究会」（明治三一年－同三六年）が設立されて、『社会雑誌』、『社会』、『社会学雑誌』などが発刊されていた期間にあたり、田中一貞はこの期にはこれらの社会学会等に積極的に関係することはなかった。東京帝大の建部遯吾も丁度この時期に海外留学（明治三一－三四年）をしており、彼についても同様のことがいえる。

しかし、翌年の明治三八年一月には、田中は図書館監督（館長）に任命され兼務する（大正十年の彼の死去まで兼務）。それまでの「書館」という名称はこの時に「図書館」と改められ、図書館事業もここにきて根本的整理改革に着手することになり田中は大学教授としての初代図書館監督（館長）に就任することになった。間もなくして慶應義塾創立五十年紀念図書館建設事業が開始され、明治四二年六月起工、大正元年四月に竣工、同五月に開館式が挙

行された（書籍二〇万冊、閲覧者収容数二百数十名）。「新鋭の大学教授をして書館監督たらしめた鎌田塾長を初めとする学校当局の意気ごみは、既に新しい書館の建物の必要を感じていたからであろう。そして田中はその期待に答えて、遥かに優れた海外の大学図書館の移植に全力を傾けたのであった」[18]。以後も長期にわたって図書館長を兼務することになった。大正二年五月より大正三年三月には学校、社会事業及び図書館視察のために露国、独逸、仏蘭西、伊太利、英国、米国と再び海外視察外遊を試みている。この視察旅行記は彼の最初の留学体験、多彩な交友録などを織り混ぜながら著『世界道中かばんの塵』（大正四年）に面白く書き残されている。大正三年十二月には日本図書館協会会長に選挙されている（大正五年十二月まで）。更に大正八年十月には米国ワシントンに開催された第一回国際労働会議に日本政府代表鎌田栄吉の随員となり出席し翌九年一月に帰国している。

塾内では、田中はその他に監事（臨時監事、明治四三年十一月-四五年二月）、商業学校主任（大正七年）、野球部長、ワグネル・ソサイェティ会長などを歴任、大正九年六月に「三田社会学会」が発足した際にはその初代の会長にもなった。この前後より体調をくずし大正十年九月二三日脳溢血に倒れ死去。「如空庵嘯月一貞居士」、享年五〇才であった[19]。

(1) 『鶴岡市史』（下巻）、昭和五〇年、四六ページ。

(2) 『現代之実業』（雑誌）（特集・三田人物論）、大正六年六月、八三ページ。三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』明治四二年六月を参照。

(3) 『慶應義塾百年史（別巻・大学編）』前出、九四ページ。明治二三年から三六年までの「大学部各科年度別在学生数表」は以下のとおりであった。

自明治二十三年至三十六年　大学部各科年度別在学生数表

学科学年 / 年度	文学科一年	二年	三年	理財科一年	二年	三年	法律科一年	二年	三年	日本法律科一年	二年	三年	政治科一年	二年	三年
23	15			20			6								
24	13	15		21	18		6	6							
25	16	6	12	21	19	17	3	5	5						
26	15	12	6	19	20	18	6	2	5						
27	12	6	8	18	12	14	2	4	1	7					
28	9	5	7	28	20	12	14	1	2	8					
29	3	4	6	18	12	15	8	4	0	4	3				
30	3	3	3	33	15	10	4	3	4	3	1	2			
31	0	2	3	0	19	14	0	2	3	0	3	1	4		
32	0	0	1	28	0	16	10	0	1	0	0	3	4		
33 1-4月	0	4	0	24	24	0	5	9	0				5	4	
33	0	0	3	0	24	24	0	5	8				0	5	4
34				48	40	23	3	6	3				0	1	2
35				61	39	36	7	3	7				7	3	1
36				86	55	36	29	6	3				21	9	4

(4) 同書、三八－三九ページ。

(5) 林毅陸「私の思出―大学部開設五十年―」、前出、七ページ。

(6) 『福澤諭吉全集』（第一九巻）、岩波書店、昭和三七年、三六二ページ。

(7) 「山形県下地震調査ニ関スル委員ノ報告」『震災予防調査報告』第八号、明治二九年三月九日。また、地元の酒田市史編纂委員会編『酒田市史（下）』（昭和三三年）には「慶應義塾田中一貞（鶴岡人）が師の福澤諭吉に災害のありさまをつげたところ、翁は双眼に涙をみなぎらして政府軍国の多事なるも（日清戦争中）その救済の薄いを嘆いた」という記載がある（一一〇ページ）。

(8) 『福澤諭吉全集』（第一八巻）、岩波書店、昭和三七年、七〇一－二ページ。

(9) 田中一貞「福澤先生の情的方面」『現代之実業』（特集・三田の人物号）、大正六年六月、四三ページ。

(10) 同上、四五ページ。田中の学生時代の様子について、堀梅夫「私の観た田中先生」（『三田評論』二九五号、大正十年十一月）によると、「私共から見れば先生は美食家であった、昔学生時代には見るも痛ましいほど苦学せられ、一切れの塩鮭を朝に嘗め、昼に汁種とし、夕に喫うという有様であった、偶々来客あれば止むなく食パンをむしって新聞紙に乗せて出したこともあったということである。幾切れも皿に盛りては主客一同に間に合わせ得ないからである。斯んな貧弱な栄養物を採りながら昼は学校、夜は時事新報社へと通うたものだから塾に居る頃も神経衰弱や脚気の為に酷く悩まされて一時休学するの止むなきに至ったのである」（四五ページ）。

(11) 『福澤諭吉全集』（第一八巻）、岩波書店、昭和三七年。『慶應義塾一二五年』、一九八三年、四二ページ。

(12) 『延岡亮天社の概況と周辺』、昭和六一年、三－五ページ。

(13) 田中一貞「亮天社及其学風」『慶應義塾学報』第八号、明治三一年十月、三九ページ。

(14) 同上、四三ページ。

(15) 『慶應義塾百年史（付録）』、昭和四四年、二九七ページ。

(16) 田中一貞「亮天社及其学風」（前出）、四四ページ。亮天社で用いられていた教科書等については、松田仙峡『延岡教学三〇〇年史』、昭和三〇年、七四－五ページ、大野正年「私学亮天社の教師、教科書並に卒業生」『延岡亮天社の概況と周辺』（前出）を参照。

(17) 田中一貞『世界道中かばんの塵』（岸田書店、大正四年）は、田中の第二回目の海外視察の際の旅行記であるけれども、随所に第一回目の塾派遣海外留学当時のことが書き込まれており、パリでの明治三五年秋から三六年末までの一年余りの留学生活の様子、河合新蔵、鹿子木孟郎、中村不折、藤村知子多、土井晩翠、白井雨山、末広重雄、岡精一、山口弘一、直木倫太郎、今井吉平等の諸氏との幅広い交流ぶりが興味深く追想されている。

(18) 『慶應義塾図書館史』、昭和四七年、五六ページ。また、『慶應義塾百年史（別巻・大学編）』（昭和三七年）にも「……義塾の中心教員として活躍したが、特に図書館の充実に大きな貢献をなし、今日の図書館の基礎をきずいた功績は最も大きい」と記されている（一〇〇ページ）。

(19) 田中一貞の著作目録を記しておくと、

・『筑紫日記』、明治三一年六月
・「亮天社及び其学風」『慶應義塾学報』（以下『学報』に省略）第八号、明治三一年十月
・「オーギュス・コムトの社会学」『学報』第十一号、明治三二年
・「加藤博士の道徳説に就て」『学報』第十四号、明治三二年四月
・「最大幸福主義と良心」『学報』第二〇号、明治三三年十月
・「一言加藤君に答ふ」『学報』第二二号、明治三三年十二月
・「ハートの教育」『学報』第三七号、明治三四年三月
・訳（ジョン・ブラッキー原著）『修養論』（J. S. Blackie, Self Culture）、東京　民友社、明治三四年七月
・「エール大学二〇〇年祭の状況」『学報』第四七号、明治三四年十二月
・「無政府主義の発達」『学報』第四九号、明治三五年
・「瑞西の風景」『学報』第七〇号、明治三六年十月
・「戦時の帰朝」『学報』第七七号、明治三七年五月
・「図書館建築に就て」『学報』第一〇四号、明治三九年六月
・「社会道徳と新聞紙の責任」『学報』第一一四号、明治四〇年
・「西洋文明と出生率の減少」『学報』第一二〇号、明治四〇年
・「公会（開）図書館の任務と貸本屋」『図書館雑誌』第四号、明治四一年
・「社会学上に於ける同種意識説と模倣説との比較」『三田学会雑誌』第一巻一号、明治四二年
・「人物発生に対する自然界の勢力」『三田学会雑誌』第一巻五号、明治四二年
・「都市と人物発生との関係」『三田学会雑誌』第二巻三号、明治四二年
・「福澤先生と明治最初の図書館」『学報』第一四五号、明治四二年
・「社会的勢力としての欲望を論ず」『三田学会雑誌』第三巻五号、明治四三年五月
・「紀念図書館建築の特色」『学報』第一七九号、明治四五年
・「煽動の力」『学報』第一八八号、大正二年
・「羅馬より」『図書館雑誌』第一九号、大正三年一月
・「西洋に於ける日本文明」『学報』第二〇二号、大正三年

・「ヴント氏民族心理学要論に就て」『学報』第二〇五号、大正三年
・「欧米視察談」『図書館雑誌』第二一号、大正三年八月
・「海外図書館訪問記」『三田評論』、大正四年一月号
・「社会の根本現象」『日本社会学院年報』第二年第三、四合冊、大正四年三月
・「番傘日記」『三田評論』、大正四年三月号
・『世界道中かばんの塵』、岸田書店、大正四年七月
・「福澤先生の情的方面」『現代之実業』（特集・三田人物号）、大正六年六月
・「労働会議所感」『三田評論』、大正九年四月号
・「小幡甚三郎の墓とニュウブランスウィック市」『三田評論』、大正九年九月号
・「プロパガンダの心理」三田社会学会編『三田社会学会講演集』（第一輯）、大正九年十一月
・『万延元年遣米使節図録』、大正九年十二月

㈣　田中一貞の「ハートの教育」と社会学

田中一貞が明治三〇年一月に宮崎、延岡の亮天社に教員として赴任して約四年間、「自主自由」の私塾での教育をひたすら享受していた時期は、丁度わが国の近代国家体制の急速な形成と近代資本主義の成立期、しかも日清戦争と日露戦争という戦争の谷間という戦間期にあって、人々が未曾有の生活変化を余儀なくされ、多くの社会問題、産業・労働問題、生活問題が深刻化し、貧富の衝突や階級分化も進み、それらに対し勢い社会運動や労働運動も抬頭しつつあった時代状況であった。学問活動においても、「社会政策学会」（明治二九－大正十三年）の結成、「社会問題研究会」の発足（明治三〇年）や「社会学会」（明治二九年末－三一年）や「社会学研究会」（明治三一－三六年）の設立などにみるようにその組織化や自立化が図られていった時期でもあった。

延岡時代、そして明治三四年五月から三七年三月までの海外留学の時期までを含めてこの時期の田中一貞は、むしろ若き教育者としてひたすら教育に情熱を傾注し、コント、ミル、ベンサム、スペンサーなどの諸説を中心に自らの社会学、社会心理学上の基礎的な勉学に励んでいたといえる。事実、この期において、「亮天社及び其学風」（明治三一年）、「オーギュスト・コムトの社会学」（明治三二年）、「加藤博士の道徳説に就て」（明治三二年）、「最大幸福主義と良心」（明治三二年）、「ハートの教育」（明治三四年）、（イェール大学在学中の小論）「無政府主義の発達」（明治三五年）などの小論、論文を『慶應義塾学報』に寄せている。また彼の人柄や書画骨董を愛する趣向も描き出している『筑紫日記』（明治三一年）を著わし、J・S・ブラッキー（J. S. Blackie）の Self-Culture, 1878, を翻訳して『修養論』（明治三四年）を刊行しているのもこの時期である。田中一貞は、この当時の社会問題や労働運動への関心を強め、社会学会等の活動に直接に参画することよりも、地方にあって苦学生として自らの「衰弱せる精神と身体」の回復を図りながら専ら教育に情熱を傾け教育者田中一貞を深く培っていったのかもしれない。更に「慶應義塾初代社会学教授　田中一貞」の社会学者田中一貞を特徴づけ、制約していったのかもしれない。

(1)田中一貞の「ハートの教育」

若き田中一貞の教育者としての側面を知るには、彼の小論「亮天社及び其学風」（明治三一年）、「ハートの教育」（明治三四年）、そして訳書『修養論』（明治三四年）が適切である。

「教育家とは何ぞ自ら精神を練り、学を研き無形の真威厳を蓄うることをなさずして、却て案山子然たる真似を為し、以て其内部の醜を蔽わんとするや」として、「……自ら生徒を愛せずして生徒に愛せられんと思うことなかれ、規則は力にあらざるを知れよ、涙なき教育家は教授屋なることを記せよ。社会人類の為に人物を作れ、

学校装飾の為に生徒を鋳造すること勿れ誠心を生徒の口より吹きこめよ」[1]と小論「亮天社及び其学風」のなかで論じていた田中は、「ハートの教育」（明治三四年）で更に自らの教育論を明確にしている。

「思うに真正の教育は、社会の為に人を造るにありて、学校の為に人を造るにあらず」「此の如く冷酷なる教育界にありて、ハートの教育を絶叫するは実に目下の急務ならざらんや」[2]と論ずる。彼によればマインド（Mind）、ヘッド（Head）とは「智的方面（理解力、判断、記憶等）をさし、「ハート」（Heart）は「人間運動の原動力」（元気、愛情、熱誠、哀情等）を意味し、「之を船にたとえれば、ハートは蒸気力にして、ヘッドは舵乃至羅針盤なり」[3]とする。しかるに、教育界の現状は、「教育の多くは切売屋なること今更云わずもがな……」。「或は必要もなき規則を雨の如く降らして生徒の良心の制裁を軽視し、只管器械的に之を束縛して以て学校一日の苟安（こうあん）を貪らんとす」。「……彼らはよく忠を説き孝を教え、愛国を唱へ尊王を叫び、猶あきたらずして勅語を繰り返し、虎の威を借りて狐の醜を覆わんとす。教えるもの其行を低くして其言を高尚にす、学生之を倣うて滔々として偽善の巷に赴く元より怪むに足らざるなり」。「此の如き器械的教育の成効する所は、無気力、不活発、世の中に出でても何の役にも立たぬ卒業生を出づる門口なり」[4]と激しく論じ断じている。

田中は、それに対して「……ハートなき道徳、即ち真情のなき徳行は到底永続きするものにあらずして、虚礼となり偽善となる」とし、「人は人を以て造らざるべからず、ハートはハートに依りて振起せしめざるべからず」[5]と云い、「ハート」を基礎にした教育論を展開している。「……余を以て之を見るに先生（福澤諭吉）の偉大なる所以の十分の九までは、其のヘッドの卓越したるに在らずして寧ろ其赤誠熱愛のハートに在りと云うも躊躇せざるなり」「是先生に親しく教を受けたるものの皆等しく知る所なり」とし、「此時に当たり教育界に春立ち帰えらしむるは実に少数なるハートの教育者の責務なり」[6]と論じていたのである。青年教育者田中一貞の情熱が溢れ出て

いるといわなければならない。

「蘇国　大学教授ジョン・ブラッキー原著、日本　田中一貞翻訳『修養論』（東京　民友社発行、明治三四年七月出版）は、訳者の「緒言」の日付が明治三三年六月になっているところからも明らかなように、宮崎、延岡の地で亮天社での教育に従事しつつ翻訳を試みた勉学の成果である。原著者の John Stuart Blackie (1809-1895) はスコットランドのグラスゴーに生れたエジンバラ大学の教授であった。ギリシアやイタリー、ドイツ、そして自国スコットランドの文学、哲学、教育に関する数多くの著書や翻訳を著わしたが、それらのなかに、Self Culture; Intellectual, Physical, and Moral, Edinburgh, 1874, という小著があり、この著を翻訳したものである。[7]「青年と学生のための案内書」と副題のついたこの「自奮自修」の修養書は、版を重ねて、独立不羈の心の強い故国スコットランドはもちろんのこと、印度や日本などにおいても広く読まれた書物だったと思われる。日本でも中学校・高等学校等で英語の教科書として使用したところも多かったらしく、田中一貞訳よりも先き立って、田中次郎訳『学生立身策』（博文館、明治三二年十月）など同書についての翻訳が数種もすでに刊行されていた程である。田中一貞は原著者のJ・S・ブラッキーに直接に手紙を差し出して訳書『修養論』に「序文」を求めたようだが、この時にはすでに原著者ブラッキーは他界しており代わりに「ブラッキー夫人書翰」が巻頭に載せてある。『修養論』は㈠「智育論」(the culture of the intellect)、㈡「体育論」(on physical culture)、㈢「徳育論」(on moral culture) が構成されている。丁度この時期は数多くの「立志」・「立身」・「成功」・「處世」・「勤学」・「修養」論（編・録）などが広く読まれたときでもあり、田中一貞訳『修養論』も版を重ねた。H・スペンサーの『教育論』(H. Spencer, Education: Intellectual, Moral, and Physical, 1861) の「智育」「徳育」「体育」にみるように、この当時イギリス本国でもこうした教育論、修養論が極めて盛んに展開されていたのである。そのブラッキー『修養論』

の「目次」を示すと次のとおりであった。

目　次

第一章　智育論
(一)書籍以外　(二)観察　(三)分類法　(四)推理力修練　(五)純正哲学　(六)想像力修練　(七)美的修練　(八)記憶修練　(九)思想表彰術　(十)書籍撰択用法　(十一)一般の修練　(十二)語学法則
第二章　体育論
(一)健康の注意　(二)運動　(三)飲食の注意　(四)空気の注意　(五)睡眠の注意　(六)水浴の効用　(七)各部の調和
第三章　徳育論
(一)品性の修練　(二)道徳と信仰　(三)美徳　(四)服従　(五)誠実　(六)励精　(七)同情　(八)敬異(ママ)　(九)節制　(十)人物真価　(十一)忍耐　(十二)徳義的勢力　(十三)感情の修練　(十四)偉人想望　(十五)感化　(十六)反省　(十七)祈禱

第一章「智育論」の冒頭の「㈠書籍以外」では、「……智識の本来の泉源は死せる書籍にあらずして、生きたる生活、経験、個人の思考、感情、及び行為に在り」「……書籍は、其以て基礎とすべき生ける経験なくんば、耕さるる地面が徒らに日光雨露に浴するが如く、何ぞ智識の繁盛を見ることを得んや」、「而して、真正の智識は

之に反して自らを考察する所の精神に於ける生ける根底より発せるものなり」[8]とし、「(一)観察」には「故に余は誠心より青年諸子に、なるべく直接に事実を観察することに依りて其研学の緒を開くべし、只齷齪として書籍のみを繰り返す勿れと勧告するものなり」「実に世に何よりも有益なる書は『観察』そのものなり」[9]とする例のように、この『修養論』全体が目次にみられるように人間生活の基礎的事項について著者ブラッキーが自らの高邁な信念と博識にもとづいて格調高く、しかも簡潔に説いたものである。田中一貞の訳も相対して読み易い文体に工夫してあり、Self Culture, Cultureを立身論、立志論、處世論、成功論などとせずに「修養論」と訳したのは田中の意をよく表わしていると考える。この書が田中自らを日夜励ます『修養論』であったと同時に、私塾亮天社で実際に教鞭をとりつつ「自主自由」な学風を育くむべく生徒の自修を促した『修養論』でもあったと思われる。

(2)田中一貞の社会学

田中は海外留学から帰国して明治三七年四月に大学部教授となり仏語及び社会学を担当することにより「慶應義塾初代社会学教授」とされるについては前述したとおりである。

田中は、慶應義塾第二回派遣留学生として明治三四年五月より同三七年三月まで、主に米国、イェール大学のW・G・サムナー(William G. Sumner, 1840-1910)、更にフランス、パリ、コレージ・ド・フランスのG・タルド(Gabriel Tarde, 1843-1904)のもとで勉学を進めた。サムナーは、アメリカ合衆国の歴史的転換期における人々の行為や規範にみる「民習」(folkways)や「習律」(mores)の変化を自由主義、社会進化論の視点から考察しようとしていたアメリカ社会学を代表する創立者のひとりであった。また、タルドは、判事、犯罪学者、社会学者、社会心理学者で、個人と個人の関係を基礎とする立場・社会名目論の視点から社会現象を解明しようとして、

『模倣の法則』（一八九〇年）、『社会法則』（一八九三年）、『世論と群集』（一九〇一年）を著わしていた。田中は社会学界、社会心理学界における新しい潮流を感じ取って帰国し、学問活動に参画していこうとする。田中の『世界道中かばんの塵』（大正四年）には、彼のこの最初の留学時代の生活振りが追想的に随所に書きそえられている。[10]

しかし、社会学者田中一貞を考察していくには、われわれにはそのための資料はかなり制限されている。そのことは、多分に田中が帰国早々に図書館監督（館長）を兼務し、新たな図書館改革事業に専ら奔走することになり、その他にも要職を重ね学校行政にも深くかかわることになるという激務と関係しているように思われる。従って、彼のまとまった社会学書、社会心理学書も一切残されていない。「オーギュスト・コムトの社会学」（明治三二年）、「社会道徳と新聞紙の責任」（明治四〇年）、「西洋文明の出生率の減少」（明治四〇年）、「社会学上に於ける同種意識説と模倣説との比較」（明治四二年）、「人物発生に対する自然界の勢力」（明治四二年）、「都市と人物発生との関係」（明治四二年）、「社会的勢力としての欲望を論ず」（明治四三年）、「煽動の力」（大正二年）、「ヴント氏民族心理学要論に就て」（大正三年）、「社会の根本現象」（大正四年）、「プロパガンダの心理」（大正九年）などの論稿が社会学、社会心理学に関するものである。

極めて限られた資料のもとではあるが、田中の社会学の特徴を検討してみなければならない。田中は、彼の海外留学以前に「オーギュスト・コムトの社会学」[11]（明治三二年）という論文を書いており、コントの『『実験哲学論』』（今日では多くは「実証哲学講義」と訳されている）をとりあげて人智発達（「神学的」、「純正哲学的」、「実験的」）と社会発達（「兵事的」、「法学的」、「殖産的」）の「三段階の法則」「社会静学」と「社会動学」などその基本的内容にすでに言及している。「……コムトは社会を以て一の有機体となし、須らく快潤なる活力に加うるに整然たる秩序を保つへきものなることを云へり」[12]、……「天下を秩序と進歩の支配の下に置かんことを企てたり。実に彼の社

会学は一方に於いて純粋なる科学なると同時に、他の一方に於ては稍時勢論の如きものありき」[13]とし、「思うに彼れの社会学は甚だ漠然として且幼稚なり、去れども彼は自ら実験哲学の元祖を以て自任したるの人、社会学の如きは其一小部分に知きす、人神明にあらず、何ぞ能く凡てのものに於て全能なるを得んや」、「……其能く之を培養し、之を発育せしむるものは後世諸学者の任なり余は爰に彼れの社会学を批評せざるべし」として、批判的な考察を試みていた。先にあげた田中の「加藤博士の道徳説に就て」（明治三二年）、「最大幸福主義と良心」（明治三二年）、「一言加藤君に答ふ」（明治三二年）においても、「……良心は転々変化して止むことなきものにして、其始只人々が生存の必要に逼られて社会的行為をなし、漸々社会の永続発達するに従ひ、追々社会的の思想感情を形造り、遂に一の良心を生ずるに至れるもの」なりと論じていたように、基本的に個々人の関係、社会的行為、社交的精神・行為より社会現象を考えるという基礎的視点・構想が形成されつつあった。

わが国の社会学界において初めてその学問活動が組織化され自立化していくのは、「社会学会」、「社会学研究会」にみるように明治三〇年前後であったが、田中一貞はこの時期には前述のように亮天社のある延岡、そして海外留学のためにこれらの動きには関係しなかった。社会学の学会活動に加わっていくのは、東京帝大の建部遯吾を中心に設立された「日本社会学院」（大正二-十二年）においてであった。たゞし、設立当初の「日本社会学院会員名簿」には彼の名前は見当らず、「大正四年十二月十日現在」の名簿に田中一貞の名が出てくる。日本社会学院は、「社会渾一体の実理的研究は、世界学壇の帰趨、而して人文改新の要機なり。夫の個人本位観と称する者、洋東の鄰邦を以てするも、亦今に於いて実に其弊に堪へず、神学的独断、形而上的弁証、談毎に清うして事往々汚、論愈々高うして理益々迂」として、「……外山故名誉教授、加藤老名誉教授以来我国亦斯学の学習あるや久し、今や門人相謀り聊か志を同じうするものを糾合して、日本社会学院と作し、涓埃を国運に効し、一粟を

人文に寄せむとす」[14]るために大正二年五月に設立された。「日本社会学院規則」によると「日本社会学院ノ目的ハ日本に於ケル社会学ノ研究ヲ奨メ業績ヲ顕スニ在リ学院ノ事業トシテ年報ヲ発刊シ集会ヲ開催ス」こととなり、『日本社会学院年報』[15]が発刊されるに至る。田中一貞はこの『年報』に「社会の根本的現象」という報告を寄せている。[16] 田中の「社会の根本的現象」は、大正三年十一月に開催された日本社会学院第二大会において田中がおこなった講演であるが、彼の社会学観を知るには数少ない貴重な資料である。

「今日社会学が一の科学として存在する以上には或一定の法則とか関係とかを研究して行くものでなければならぬ」。「……そこで社会上の種々雑多の関係を、根本的に段々元へ還して行ったならば、どう云う所に帰着するであろうかと云うことが社会学上の大問題であります」[17]として、社会の根本現象を四種類の関係に分類する。それらは、(i)「社会と社会の関係」、(ii)「社会から個人へという関係」、(iii)「個人から社会への関係」、(iv)「個人と個人の関係」である。田中に従って、それらの内容について簡潔に触れると、それらをめぐる社会学上の立場として(i)社会と社会の関係を重視する立場は、社会を既に成立てるもの、我々人間が初めから社会的生活をしたもの、と仮定してその社会と社会の関係を論ずる立場であり、例として「グンプロウィッチ」(L. Gumprowitz) の利害対立説、集団闘争説などを挙げる。次いで、(ii)社会から個人へという関係を重視する立場は、社会が能動的で個人が受動的とみなされる関係としてとらえられるのであり、この説の例として「デュルケーム」(E. Durkheim) が挙げられている。

(iii)の個人から社会に及ぼす関係を重視する立場とは、云ってみれば「福澤先生の如き社会」の先覚者とか偉人とかエリートが社会の中核となって社会を感化し動かしていくという視点であり、ロシア出身のフランスの社会学者「ノヴィコフ」(A. Novikov) の学者の例に言及する。更に、(iv)個人と個人の関係を重視する立場は、文字通

り個人個人の関係を社会の根本現象と考える立場であり、「ギデングス」(F. H. Giddings) や「タールド」(Gabriel Tarde) の立場であるとする。田中一貞はこれらを概括したうえで、基本的にはこの最後の(iv)個人と個人との関係を重視する立場を採用して、「個人の精神を発足的として行くのは最も単純で便利でありはせぬかと思います。我々日本人は大和魂に依て動かされて居るけれども、其大和魂なるものは我々個人を超越して何処にありますか我々の精神以外に何処にもない、只我々日本人に共通なる精神を抽象して考うる時は此大和魂なるものを仮に客観的に考へることも出来るが、其実は此精神は各人の脳髄内に沈澱して居って其れから種々の動作に現れ社会的の働をなすもの」として、「……社会学に於ては其根本現象は帰する所人と人との関係でなければならぬと思うのであります[18]」と述べている。

しかし、この個人と個人との関係を社会の根本現象とする立場の説明に終る限りでは、田中一貞の独自の社会学観が明らかになるとはいえない。そこで、タールドの模倣説やギディングスの同類意識説などに言及しつつ、「此社会的関係の精神的関係の中には、模倣、同情、同類に対する情と云うようなものがあると見て、其何つれが其中でも最も根本的のものであるか[19]」を定めなければならない。いくつかの具体的な実例や田中の体験などを挙げつつ、模倣、同類意識、同情とが互に深い関係にあり互に交錯しているものとみなされるが、田中は「……此同情と云うことは直接に社会関係の基礎であって、同類と云うことは必ずしも必要のものでない[20]」とし、「……同情は同種類と云う意識よりも、却って異種類と云う意識から喚起せられる場合があることを承認せねばなりませぬ[21]」とする。

「シンパシーと云うものはもっと広い意味で人と人との感情を同じうして行くもの、即ち人の喜びを喜び、諸君の心と私の心を一緒に動くと云うような、交換的の関係[22]」がその中にあり、こういう風にみたならば「……此

同情と云うことは、社会的現象を説明する根拠となり社会化の第一の動力」[23]であるとする。ここに人と人との間の同情に基づく個人間の関係として社会現象を考察しようとする田中一貞の基本的な社会学観が滲み出ているといえる。大正三年十一月の日本社会学院の同じ大会会場の場で建部遯吾は、「帝国の国是と世界の戦乱」を論じ、「天壌無窮の皇運」にもとづく「領土拡張主義」によって、「大陸渾一主義に依る所の領土拡張」と「社会化、俗に同化とも申すのであるが、我日本の社会性を以て社会化することが可能であるならば、其時には多少の混血は我国力を害せざるのみならず、寧ろ国力を新たにするものあり」[24]と時事論を断じていたのである。

田中一貞のその他の論文として、「社会学上に於ける同種意識説と模倣説との比較」(明治四二年)、「社会的勢力としての欲望を論ず」(明治四三年)、「ヴント氏民族心理学要論に就て」(大正三年)などもあるが、これらは先の「社会の根本的現象」に示された彼の社会学観、社会学論に連らなる論文である。更に、「人物発生に対する自然界の勢力」(明治四二年)、「都市と人物発生との関係」(明治四二年)は「人物発生」と特に社会的勢力、個人的努力との関係を論じ、社会的刺激としての人間交通・人間交際のありようと個人的な努力の重要性を指摘しているものでパーソナリティ形成論、社会移動論などの領域にかかわる論文である。福澤諭吉の『民情一新』とのかかわりも考えてみることができる。「西洋文明と出生率の減少」(明治四〇年)、「西洋に於ける日本文明」(大正三年)などは彼自らの欧米留学体験や交通、人間交際、個人間の関係を重視する社会学観・社会学論に支えられた興味深い比較文化論の試みともいえる。

更に、「社会道徳と新聞紙の責任」(明治四〇年)、「煽動の力」(大正二年)、「プロパガンダの心理」(大正九年)は、人間社会における感情的側面、その暗示性・感化性の及ぼす影響に言及して新聞やプロパガンダの問題を論じたもので、群集心理学、社会心理学やコミュニケーション論にかかわるものであった。田中の最後の論文となった

「プロパガンダの心理」では、「相当知識ある人も今日の如く思想界が混乱し刺激が多くなっては自ら群集の精神状態になり、少しく油断すればプロパガンダに乗ぜられるので、此点は下層人民と大した相違がない。今日の学者が皆同じようなことを論じ、然かもなるべく極端なことを云うて人気を取らんとして居るのは、自ら宣伝的暗示を受けていると同時に、宣伝的動作をなして居るものである。[25]」「故に宣伝の矢を一々評価して見る、即ち批評して見なければならぬ。書物を読むにも先づ之は宣伝の発表であるか、プロパガンダであるかを見分け、プロパガンダであると判明すれば殊に注意して之をかみ砕き合理化し受け入なければならぬ[26]」、「四方より打寄する社会的刺激を機械的に請入れてはならぬ、過去の習慣にのみ拘泥してはならぬ、宣伝でも煽動でも成るべく多数の潮流をあつめて之を内観的に消化し過去の習慣をよく之を選択して精錬して用ゆべきである[27]」、と考察していた。

(3)「三田社会学会」の発足

一九二〇年前後も第一次世界大戦を前後に世界的にも国内的にも大きな激動の時期であった。そうした激動の渦のもとでひとつの社会層としての学生層においても新たな社会認識を模索して大きな時代状況とかかわらざるを得なかった。慶應義塾においても一九二〇（大正九）年六月十五日に発足した「三田社会学会」は学生達の発案によって発足し、田中一貞が彼の急逝まで短期日ながらその会長を務めた。

「三田社会学会設立之趣意[28]」

現時の思想界は将に渾沌として人心の帰嚮する所を知らず。社会問題は益々紛糾を極め吾人を迷宮に導かんとす。遠き慮なければ必ず近に憂あり。将来実社会に立ちて雄奮せんとする我々塾生にとりて社会上に現出する諸問題を社会学及び実際上の見地等より仔細に研究し先輩名士等の意見を叩き又講義を開き其の結果を出版物と為して弘く之を頒ち以て円満なる常識養成の一助となすは最緊要事の一なり。

茲に於てか生等不肖を顧みず、如上の趣旨に則り、三田社会学会なるものを組織するに至れり。もとより生等粉骨の労を辞せざるもの、冀はくは同好の諸先輩及塾生諸兄の御援助を辱ふし益々本会の盛大に赴かん事を熱望して止まざる次第なり。

慶應義塾三田社会学会発起人総代
文科本科学生　高山修一
理財科本科学生　高橋政雄

このようにして発足した「三田社会学会」によって試みられた講演等を一冊の書としてまとめたものが『三田社会学会講演集（第一輯）』（大正九年十一月）であった。その目次に従って記すと、「緒言・（文科学長）川合貞一、本会の成立を祝す・（法学博士）岡　実、資本家の雇人より見たる社会及労働問題・（鐘紡専務取締役）武藤山治、近代社会事業の大勢・（東京市社会局長）窪田文三、プロパガンダの心理・（慶應義塾大学教授）田中一貞、社会学発展の径路・（慶應義塾長）鎌田栄吉、社会学及び其の応用・（法学博士）遠藤隆吉」からなるものであった。先にとりあげた田中の論文「プロパガンダの心理」は、この「三田社会学会」の発足式当日になされた講演であった。その後「三田社会学会」の活動は継続されたが、大正十年九月に田中一貞の急逝によって同会の「会長に義塾文学部長川合貞一氏」へと代っていった。[29]

三田社会学会編『社会思潮』（第一編）（大正十一年）によってその当時の同会の活動と社会思潮の一端を知ることができる。目次に従って「日本の産業に於ける自由主義及び社会主義（上田貞次郎）、社会学概論㈠（小林郁）、思想の変遷（鎌田栄吉）、支那社会一般（服部宇之吉）、実務家より見たる労働問題（武藤山治）、我が社会学（後藤新平）、協調会と社会政策に就て（渋沢栄一）、社会政策と米（鈴木梅四郎）、時代思想と国民の覚悟（窪田文三）、新農

村の建設と青年の教育（留岡幸助）、社会動学的一考察（綿貫哲雄）、社会進歩の根本的素因（福谷益三）、石炭界の現状（阿部吾市）、我国労働運動の傾向（鈴木文治）、農村問題（高橋政雄）」などの論文・講演が収められていた。

(4)図書館事業

田中一貞が海外留学から帰国した翌年の明治三八年三月に慶應義塾図書館監督（館長）に就任し以後義塾図書館の根本的整理改革に深くかかわっていった経緯についてはすでに触れたが、ここでは彼の社会学観との関連で図書館事業を少しく考えておきたい。

福澤諭吉は『増訂華英通語』（万延元年）でLibraryを「書楼（ショモツグラ）」と訳し、また『西洋事情、初編』（慶應二年）でそのなかで「文庫」について触れ、「西洋諸国の都府には文庫あり。……日用の書籍図書等より古書珍書に至るまで万国の書皆備り、衆人来りて随意に之を読むべし」[30]と紹介していた。福澤のこうした図書館事業に対する強い関心をも受けて、田中一貞「公会（開）図書館の任務と貸本屋」（明治四一年）、「福澤先生と明治最初の図書館」[31]（明治四二年）などの論稿も注目に値する。

図書の館外貸出について触れて、田中は「……図書館たるものは之に応ずる政策として、自ら進んで断然従来の鎖国主義を放棄し、繁縟制度を打破し、貸本屋と並行して盛に図書の館外貸出を行うに非ずんば、何れの世にか読書社会の趣味を高潔ならしむることを得べき」。「其被害甚しきものあるべしと論ずる人もあるべし。是れ一応道理ある議論なれども更に熟慮すれば、社会の道徳なるものは人々諸種の事情に遭遇するに依りて発達するものにして、如何なる制度と雖も多少の弊害の為に之を廃止する時は、起るべき道徳も機会を失ひ、暗より暗に葬らるるなんと云うべからず」[32]と述べていたのである。ここにも、田中の自ら培われた人間観、社会観、社会学観が反映されているとみるべきであろう。

田中一貞の社会学観、社会学論の形成と内容を知るには、限られた資料と考察ではあるとしても、当時の東京帝大の建部遯吾らの国家有機体説を軸とする社会学観と対比して、むしろ個人間の関係を根本現象として重視、個人の社会関係を基礎とする社会学における心理学的社会学という新たな学問傾向を推し進め、また塾の社会学の中心的存在を担ったのであった。そして田中のこの社会学観と学問傾向は、福澤諭吉や慶應義塾において培われてきた「一身独立」の私立に根ざす、権力偏重と形式主義を批判し自主自由を尊重する気風を継受するものでもあった。

(1) 田中一貞「亮天社及び其学風」(前出)、四六ページ。
(2) 田中一貞「ハートの教育」(前出)、十四ページ。
(3) 同上、十五-六ページ。
(4) 同上、十七-八ページ。
(5) 同上、十六ページ。
(6) 同上、十八ページ。
(7) John Stuart Blackie (1809-1895) については、Thompson Cooper, Men of the Time: A Dictionary of Contemporaries, Tenth Edition, London, George Routledge and Sons, 1875, pp. 114-5, The Dictionary of National Biography, vol. XII, Supplement Oxford Univ. Press, 1921-22, pp. 204-7.
(8) 田中一貞訳『修養論』(前出)、二-四ページ。
(9) 同上、四ページ。
(10) 田中一貞『世界道中かばんの塵』(前出)では、前述のようにエール大学での学生生活、パリでの生活が面白く描写されているが、「ベルグソン氏」や「社会学の大家ジュルケーム氏」との面談体験なども述べており興味深い。二二三-二五九ページ、三三八-三四二ページ、三六二-三ページなど。
(11) 田中一貞「オーギュスト・コムトの社会学」『学報』第十一号、明治三二年。
(12) 同上、四ページ。

(13) 同上、三ページ。

(14) 建部遯吾「叙」『日本社会学院年報』(第一年)、大正三年、一－二ページ。

(15) 「日本社会学院」は、一九一三(大正二)年に設立されて、その機関誌として『日本社会学院年報』(大正三年－十二年、全一〇巻)が刊行され続けた。その後は新たな社会学界の組織として大正十三年に「日本社会学会」が設立されて『社会学雑誌』(大正十三年－昭和五年)が出されたが、時期的には全くの短い期間だが、並行して「日本社会学院年報、第十一年」等として日本社会学院によって『社会学研究』(大正十四年四月－同十五年八月、第一巻一－四号)が継続刊行されていたことも見落してはならないだろう。更に、すでに言及した「社会学会」(明治二九－三一年)、「社会学研究会」(明治三一－三六年)の後に、社会学を中心とする学問活動の組織化として建部遯吾による「日本社会学院」が設立されるまでの間にも、「東京社会学会」という組織化が図られ短い時期ながら活動があったことも注目される。田中一貞もこれに加わり明治四五年九月のその「第二回例会」(慶應義塾大学図書館で開催)では田中は講演者であった(『哲学雑誌』第三〇八号、明治四五年、『哲学雑誌』第三一四号、大正二年、参照)。

『日本社会学院年報』の「時報」には当時の大学での「教科」や「社会学講座」等の近況も報じられている。「慶應義塾大学社会学教科」としては次のような記事が載せられていた。

・「慶應義塾大学部に於て、社会学の講義は教授田中一貞の担任にして、同氏は政治科及哲学科に於て社会学原理を講じ、猶文科予科に於てルボンの群衆心理を講じ居れり。其外関係学科の講義を挙ぐれば、堀江帰一氏の理財科に於ける最近社会問題は、重に英国に於ける諸種の社会政策の内容と其批評を授け、史学科に於ては田中萩一郎氏思潮史と題して近世社会思想の変遷を述べ、船田三郎氏は同じく史学科に於て歴史哲学を講じ、ランプレヒトを始め諸家の学説を比較研究しつつあり。(田中一貞)」(『日本社会学院年報』第三年、大正五年、一八九ページ。

・「今学年慶應義塾大学政治科文科哲学科史学科に於ける社会学原理は田中教授(一貞)之を担任し就中第一学期は主として社会学史を講ず。今春より新に教授の任に就ける新帰朝小泉信三氏(大正五年三月帰朝)は政治科及理財科にて最近社会問題を講ず。(三浦哲郎)」(第四年、大正六年、一七七ページ)

・「慶應義塾大学にては、田中教授　社会学原理、本講義は文科及政治科学生に課し本年度は主として社会心理及進化論を講ず。小泉教授　最近社会問題、本講義は政治科及理財科学生に課し英国の社会政策を主とす。船田教授　歴史哲学(Rickert Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft)」(第五年、大正七年、二〇八ページ)

・「慶應義塾大学にては、政治科及哲学科に於て田中教授、社会学、本年は社会学史に重きを置きて講義す。史学科に於て加藤(繁)教授は支那社会史として支那の政治経済道徳の各方面より支那の社会組織及歴史を講じ、船田(三郎)教授は歴史哲学を講じ殊に其発達の経

路に重を置く。（田中一貞）」（第六年、大正八年、一六八ページ）

・「慶應義塾大学部に於て社会学に関する講義、社会学原理、政治科史学科哲学科　田中一貞氏。歴史哲学　史学科　船田三郎氏。支那社会史　史学科　加藤繁氏。人類学　史学科　移川子之蔵氏。（田中一貞）」（第七年、大正九年、九五ページ）

『年報』の刊行は、実際の教科の講義年度より一年遅れて報じられたと考えられる。

(16) 田中一貞の「社会の根本的現象」の報告のおこなわれたのは、「日本社会学院第二大会」（大正三年十一月二日、於東京高等師範学校）においてであった。その日の主な報告者を記すと、田中の他に、吉田静致（国民思想動揺の原因）、藤井健治郎（同上題目）、吉田熊次（教育と社会）、大場茂馬（予防主義を批評す）、嘉納治五郎（国民道徳統一の必要を論ず）、建部遯吾（帝国の国是と世界の戦乱）、大森禅戒（宗教政策と国民思想の動揺）、谷本富（活きた社会学）などであった。

(17) 田中一貞「社会の根本的現象」『日本社会学院年報』（第二年）、大正四年、五七ページ。

(18) 田中、同上、六〇－六一ページ。

(19) 田中、同上、六四ページ。

(20) 田中、同上、六七ページ。

(21) 田中、同上、六六ページ。

(22) 田中、同上、六八ページ。

(23) 田中、同上、七〇ページ。

(24) 建部遯吾「帝国の国是と世界の戦乱」『日本社会学院年報』（第二年）、大正四年、一一四ページ。

(25) 田中一貞「プロパガンダの心理」（前出）、七六－七七ページ。

(26) 田中、同上、七六ページ。

(27) 田中、同上、七八ページ。

(28) 三田社会学会編『三田社会学会講演集』、大正九年、一ページ。当時の『三田新聞』紙上でも、「義塾社会学会、近く設立されむ」（大正九年四月二二日）、「愈々発会式を挙げた三田社会学会（十五日、大ホールにて岡、遠藤両博士講演）」などの見出しで報じられていた。

(29) 三田社会学会編『社会思潮』（第一編）（大正十一年）には「三田社会学会会報」が載せてあり、当時のこの学会の活動状況を知ることが出来る。そのなかに大正十年十月二八日の会合で「会長田中一貞氏の逝去を期として本会の組織を改造し、会長に義塾文学部長川合貞一氏を顧問に塾長鎌田栄吉氏、理事に義塾教授福谷益三氏、同加田哲二氏、会計監督に義塾理財学士林敏氏等の諸氏就任せられ、幹事は従前通り高橋政雄君とす」（三一八ページ）とある。

(30) 福澤諭吉『西洋事情、初編』(慶應二年)(『福澤諭吉全集』第一巻、昭和三三年、岩波書店、所収、三〇五ページ)
(31) 田中一貞「公会(開)図書館の任務と貸本屋」(前出)、「福澤先生と明治最初の図書館」(前出)は、福澤と明治初期の図書館事業創業とのかかわりを調べていくうえでも貴重な文献であろう。
(32) 田中「公会(開)図書館の任務と貸本屋」『図書館雑誌』第四号、明治四一年、三ページ。

(五) むすび

本稿では、「慶應義塾初代社会学教授　田中一貞」と題して、慶應義塾における知的伝統の再考察という意図のもとで学問活動のひとつの分野として社会学をとりあげ「初代社会学教授」田中一貞に焦点をあてて再考察を試みたものである。ここでは、それについて(一)明治期社会学界と慶應義塾、(二)田中一貞の生涯、(四)田中一貞の「ハートの教育」と社会学、の順で言及してきた。一本の樹木といえども、長い間の風雪に耐え一年一年の年輪を刻み込んで成長していくことは容易ではないだろう。われわれは樹木を育くみ樹林へと成長させていくことよりも、しばしばそれらを傷めたり、放り去ったり、あるいは手をかけすぎいじくりまわして、絶え絶えに枯らしてしまいかねない。継受すべき知的伝統は深く広く掘り起されて、われわれが如何にして新たな風雪のもとでそれらを大事に大きく育て次の世代に引き渡していくかが肝心であろう。

(i)近代日本社会学史研究において、これまでは近代日本全体としての社会学史研究に重点がおかれて、個々の大学や教育・研究機関等における社会学史、社会学の歩みを検討する作業が相対して軽視されてきたという点に照らして考えれば、本稿は後者に関連する作業として位置づけられる。こうした作業を通じて、ともすると特定の機関や系譜だけに焦点をあてて近代日本社会学史全体を特徴づけてしまうのではなく、多様な系譜やさまざま

の錯綜した歩みが検証され浮き彫りにされてくることになる。近代日本社会学の草創において慶應義塾にかかわった人々が重要な足跡を刻み込んだのは明らかである。本稿はそうした動きを検証する方法論的な模索のひとつともいえる。福澤諭吉の社会思想、社会学思想等についても、前者の作業としても、後者の作業としても、あらためて再考察していく必要がある。特に明治前半期においては大学等も学問機関・研究機関としていまだ充分に組織化・制度化されておらず、学問活動自体が広範で、しかもさまざまに重なり交錯して動いていた状況にあっては、民間における学問活動や個々の機関・集団等の学問活動やそれらの小さな組織化や制度化の試み・動きにもより一層眼を向けていく必要があろう。

(ii)本稿の㈠「はしがき」で意図したもうひとつの課題、即ち、個々のひとりひとりの人間、社会学者の生涯にそくした彼（彼女）の社会学の営み、「社会学的生涯」を跡づける作業、について考えてみれば、まだ充分に深められて考察されたとはいえない。田中一貞というひとりの人間の社会学にかかわった足跡の「ひと（人）起し」の作業でもある。人間考察、これは明らかに果てしなく途方もなく（絶望的に）難しい課題である。

田中一貞の「福澤先生の情的方面」（大正六年）にみる如く、「人を動かす力」において福澤諭吉が田中に及ぼした影響は極めて大きかったといえる。勉学に燃える志半ばで病に倒れ故郷で受取った福澤の書翰が彼を如何に慰め励ましたか、はかりしれない。田中はこの書翰について「この一文が当時病中の私を如何に慰め如何に感動さしたかは私は生涯之を忘れることは出来ぬ」と記していた。社会学者としての田中一貞については、その資料も限られ、わたし自身の研究不足から、充分に考察を深めることは出来なかったけれども、田中一貞の社会学者としての基本的な足跡と社会学観を明らかにし得たと考える。形式主義にとらわれず、自主自由の精神を生き、当時の東京帝大の建部遯吾らの国家有機体説を軸とする社会学観に対比して、むしろ個人の社会関係を基礎とす

る社会学における心理学的社会学という新たな学問傾向を推し進め、また塾の社会学の中心的存在を担ったのである。

(iii)田中一貞に関する短文の人物論も少しは残されているが[1]、笠原嘉次郎は「田中教授を憶ふ」の中で次のように書いていた。「天若し君に仮すに年を以てし、与ふるに閑月日を以てし、徐ろに著述に従事せしめたらんには必ずや大作の見るべきものあるは余の信じて疑はざる所にして、君の長技は蓋し此にありしに其本領を発揮することなくして長逝せるは惜むべきなり[2]」と。

田中一貞の生涯をみるとき、彼の生涯はまさに慶應義塾に「其一生涯」を投じたといえるかもしれない。しかし、これはあくまで仮定のことだが、笠原の記した如く田中の「其本領」が、多忙を極めた図書館事業等教育行政等ではなく、学問著述等に発揮せしめられていたならば、もうひとりの「田中一貞」の生涯を跡づけることが可能であったかもしれない。

(iv)本稿を通じて福澤諭吉の知的伝統の特徴と慶應義塾における知的伝統の形成とその後の経緯を検証するには、いまだ断片的な試みでしかないことは明らかである。「慶應義塾初代社会学教授　田中一貞」の足跡はひとつの足跡である。大学令にもとづく慶應義塾における社会学の歩みは、田中の亡き後、広く福谷益三、若宮卯之助、加田哲二、新館正国、奥井復太郎、藤林敬三、佐原六郎、米山桂三等々とわれわれの大先輩の諸先生に引き継がれていく。第二次世界大戦終戦前までの足跡に限ってみても、まだ検討を試みなければならない課題が残されているのである。

(1) 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』明治四二年六月、三三一－二ページ、「教授迷名伝（田中一貞先生）」『三田新聞』大正八年六月三〇日、「田中一貞君を偲ぶ（占部教授談）」『三田新聞』大正十年十月十八日、堀梅夫「私の観た田中先生」『三田評論』二九五号、

大正十年十一月、笠原嘉次郎「田中教授を憶ふ」『三田評論』二九五号、大正十年十一月、東奥逸人『私学の天下、三田生活』研文社、大正四年、五〇－五一ページなど。

(2) 笠原嘉次郎「田中教授を憶ふ」(同上)、三九ページ。